プロペルティウス 3.6 と『ギリシア詞華集』における恋人同士の誓い[*1]

千葉槙太郎

プロペルティウス 3.6 は詩人が奴隷のリュグダムスへと呼びかけるところから始まり、そのリュグダムスを通して、詩人とキュンティアと思われる女性とのやりとりがなされる詩である。Heyworth & Morwood は似たような構造として、『ギリシア詞華集』の 7.524（カッリマコス 13Pf）と 5.46 を挙げるが[*2]、恋人同士の誓いという共通のテーマであることを考慮して、本論ではさらに『ギリシア詞華集』5.6, 5.52 とも関連があるのではないかと考えその対応関係をみていきたい。また会話調の詩という点ではすでに Heyworth & Morwood が挙げている 5.46 に加えて『ギリシア詞華集』5.101 との関係も見ていくこととする。

[*1] プロペルティウスのテキストは S.J.Heyworth, *Sexti Properti :Elegos*, Oxford 2007 を用いたが、適宜その読みに従わず違う読みを取っている場合もある。『ギリシア詞華集』のテキストは A.S.F.Gow & D.L.Page(ed.), *The Greek Anthology :Hellenistic Epigrams* 2 Vols., Cambridge, 1965, A.S.F.Gow & D.L.Page(ed.), *The Greek Anthology :The Garland of Philip* 2 Vols., Cambridge, 1968, D.L.Page(ed.), *Further Greek Epigrams :Epigrams Before A.D.50 From the Greek Anthology and Other Sources, Not Included in Hellenistic Epigrams or the Garland of Philip*, Cambridge, 1981 を用いている。『ギリシア詞華集』の読みの問題については Thomas Gärtner, Textkritische Bemerkungen zu erotischen Epigrammen der Anthologia Palatina. *SCI* 26, p.1-18, 2007 も参照している。

[*2] Heyworth & Morwood, *A Commentary on Propertius Book3*, Oxford, 2011 p.146

Dic mihi de nostra quae sensti uera puella: 1
sic tibi sint dominae, Lygdame, dempta iuga. 2
omnis enim debet sine uano nuntius esse, 5
maiorem metu seruus habere fidem. 6
nunc mihi, si qua tenes, ab origine dicere prima
⋮
num me laetitia tumefactum fallis inani, 3
haec referens quae me credere uelle putas ? 4

1 sentis *Ω* sensti *Butrica* 3-4 post 12 Heyworth

私に言ってくれ、私の恋人についてお前が本当のところ感じたことを。
そうすれば、リュグダムスよ、お前の女主人のくびきは外されることになろう。
使者はみな嘘なしでいなければならないし、
奴隷は恐怖のためにより信頼が置かれるべきだからである。
⋮
まさかお前は空虚な喜びで、私を得意がらせてだますんじゃあるまいな。
私が信じたいと思うことを伝えて。

umidaque impressa siccabat lumina lana 17
rettulit et querulo iurgia uestra sono :
“haec te teste mihi promissa est, Lygdame, merces ?
est poena et seruo rumpere teste fidem. 20
ille potest nullo miseram me linquere facto
et qualem nolo dicere habere domi ?
gaudet me uacuo solam tabescere lecto ?
si placet, insultet, Lygdame, morte mea. 24

ぬれた目を羊毛に押し付けて乾かし、
お前の非難を不平ばかりの言葉で彼女は繰り返した。

「これが、証人のお前によって私に約束された見返りなの、リュグダムス。
　証人が奴隷であっても約束を破るには罰がある。
あの人は私が何もしていないのに哀れな私を捨て置くことができるのね。
　そして、私が口にもしたくないような女と家にいるのね。
あの人は私が一人で虚ろなベッドで痩せ細っていくのを喜んでいるのね。
　もし、それがいいのなら、リュグダムスよ、私の死に飛び上って喜ぶがいい。

si non uana canunt mea somnia , Lygdame, testor,　31
　poena erit ante meos sera sed ampla pedes :
putris et in uacuo texetur aranea lecto :
　noctibus illorum dormiet ipsa Venus.”
quae tibi si ueris animis est questa puella,　35
　hac eadem rursus, Lygdame, curre uia,
et mea cum multis lacrimis mandata reporta :
　iram, non fraudes, esse in amore meo.
me quoque consimili impositum torrerier igni
　iurabo, bis sex integer ipse dies.　40
quod mihi si tanto felix concordia bello
　exstiterit, per me, Lygdame, liber eris.

31 cadunt ς canunt *Ω*[*3] 39 torrerier *Palmerius* torquerier *Ω*

私の夢が空虚を歌わないのだとすれば、リュグダムスよ、私は誓う、
　私の足元に遅まきでも、多くの罪があるだろう。
空ろなベッドには埃っぽいクモの巣が作られるだろう。
　彼らの夜にはウェヌスも眠るだろう。」
もし、こういったことをお前に本心から恋人が不平を言っているのならば、
　この同じ道を戻って、リュグダムスよ、走っていけ。

[*3] Heyworth は cadunt を取るが canunt でも意味上は問題ないと判断し写本の読みをそのまま残す。

そして多くの涙と共に私の教えを持ち帰れ。
　私の愛には怒りはあっても欺きはない。
私もまた同じような火に置かれ焼かれていることを
　私は誓う。6 の 2 倍の日の間私は貞節であったと、
けれどももし、あれほどひどい戦争から私に幸せな和平があるのなら
　私が関わるかぎり、リュグダムスよ、お前は自由となるだろう。

Ὤμοσε καλλίγνωτος Ἰωνιδι , μήποτε κείνης
　ἕξειν μήτε φίλον κρέσσονα μήτε φίλην.
ὤμοσεν· ἀλλὰ λέγουσιν ἀληθέα τοὺς ἐν ἔρωτι
　ὅρκους μὴ δύνειν οὔσατ ἐς ἀθανάτων.
νῦν δ΄ ὁ μὲν ἀρσενικῷ θέρεται πυρί· τῆς δὲ ταλαίνης
　νύμφης , ὡς Μεγαρέων , οὐ λόγος οὐδ΄ἀριθμός.

カッリグノートスはイオーニスに誓った。
　あの人よりも近しい男も、あの人よりも近しい女ももたないと。
彼は誓った。しかし、恋の中での誓いは
　神々の耳には届かないという真実が巷では言われている。
そして、今や彼は少年の火によって暖かくされている。そして、哀れな
　その人の女は、メガラ人たちの言うように、物の数にも入っていない。

『ギリシア詞華集』5.6（カッリマコス）

†ὅρκον κοινὸν†ἐρωτ΄ἀνεθήκαμεν· ὅρκος ὁ πιστήν
　Ἀρσινόης θέμενος Σωσιπάτρῳ φιλίην.
ἀλλ΄ἡ μὲν ψευδὴς κενὰ δ΄ὅρκια· τῷ δ΄ἐφυλάχθη
　ἵμερος· ἡ δὲ θεῶν οὐ φανερὴ δύναμις.
θρήνους, ὦ Ὑμέναιε , παρὰ κληῖσιν ἀκούσαις
　Ἀρσινόης παστῷ μεμψαμένους προδότῃ.

1 ὅρκῳ Hermann ὅρκον P 6 μελψόμενος Gärtner μεμψάμενος P

共なる誓いを私たちは恋にゆだねた。ソーシパトロスとアルシノエーとの間の
　誓いが信のおける親愛の情を置くことで。
だが、彼女はうそつきだ。誓いは虚ろだったのだ。
　それでも彼の愛は保たれた。神々の力というのは明らかではない。
ヒュメナイオスよ、門のところで聞くがいいさ、
　アルシノエーの裏切りのベッドをあざける挽歌を。

『ギリシア詞華集』5.52（ディオスコリデース）

プロペルティウスにせよ、『ギリシア詞華集』のエピグラムにせよ、両者ともに共通のモチーフは、「誓い」であり、さらにその誓いが「空虚」なものだったということである。本来、誓いというものは守られるべきものであるが、殊、恋愛詩においては、その誓いは「空虚」であったことがわかる、という文脈が多い。誓いまでした親しい二人のうちの片方が、その誓いを果たさなかった相手に対して、恨みつらみを言うところに詩の重点がある。さらに、これらの詩においては、神々がこの事態に対して介入していないことも言及される。ἡ δὲ θεῶν οὐ φανερὴ δύναμις(『ギリシア詞華集』5.52.4 ディオスコリデース) τοὺς ἐν ἔρωτι / ὅρκους μὴ δύνειν οὔσατ ἐς ἀθανάτων(『ギリシア詞華集』5.6.3-4 カッリマコス)。表現上似たものとしてはプロペルティウス 3.6.34 では dormiet ipsa Venus とキュンティアがプロペルティウスかもしくはその相手の女性に対して不感症となるように呪う言い回しとなっている。それぞれ言い回しは微妙に異なるが、どれも神々の力の及んでいないこと、もしくはその不在を示す言い回しになっていて、恋愛がうまくいかないことは、神々にもどうしようもないことがこうして示されている。

恋人の間での誓いが破られても罰がないという例はヘーシオドス『断片』73Most=124M.-W.=187Rzach にもみえる[*4]。ἐκ τοῦ δ΄ὅρκον ἔθηκεν ἀποίνιμον ἀνθρώποισι|νοσφιδίων ἔργων πέρι Κύπριδος. この記述はプロペルティウス 3.6.20 est poena et seruo rumpere teste fidem. のキュンティ

[*4] A.S.F.Gow & D.L.Page(ed.), *The Greek Anthology :Hellenistic Epigrams Vol.2*, p.165

アの台詞とは明らかに反対である。キュンティア（もしくはプロペルティウス？）がこのヘーシオドスの断片やこれに近い文言を知っていてそれを踏まえた台詞であることは容易に想像できる。

誓いという言葉は『ギリシア詞華集』5.6 では 1 行目と 3 行目に ὤμοσε(ν) という動詞が行頭で繰り返し効果的に使われている。このカッリマコスの詩を明らかに踏まえていると考えられているのが、カトゥッルスの 70 番の詩である。

nulli se dicit mulier mea nubere malle
quam mihi, non si se Iuppiter ipse petat.
dicit : sed mulier cupido quod dicit amanti
in uento et rapida scriber oportet aqua.

私の愛する女性が言った、私以外の誰とも彼女は結婚したくないのだと
ユピテル自らが彼女に言い寄るのでない限り。
彼女は言った。でも女が熱心な恋人に言ったことは、
風と流水の中で書いたものとすべきよ。

カッリマコスの詩では ὤμοσε(ν) となっているところが、このカトゥッルスの詩では dicit という動詞で繰り返されている。プロペルティウス 3.6 でも 2 度誓うという言葉は使われている。testor(31) と iurabo(40) である。ただし、それぞれの言葉は話者が異なっている。31 行目の testor はキュンティアがリュグダムスに向かって言っている言葉であって、40 行目の iurabo はプロペルティウスがリュグダムスに言う言葉である。カトゥッルスの詩がカッリマコスの詩を踏まえていることは、カトゥッルスのどの注釈書でも指摘されているほど明らかであるが[*5]、プロペ

[*5] W.Kroll, *Catull*, Stuttgart, 1959 pp.242-243, Cornelius Hartz, *Catullus* Hans Peter Syndikus, *Catull: Eine Interpretation Dritter Teil Die Epigramme(69-116)*, 1987 pp.3-6, Darmstadt, 1987 Robinson Ellis, *A Commentary on Catullus*, 1889(repr.1979) p.435, D.F.S.Thomson, *Catullus*, Toronto, 1997 p.492, John Kevin Newman, *Roman Catullus: and the Modification of the Alexandrian Sensibility* pp.248-50

ルティウスでは効果的な繰り返しとは見えず、この詩において重要なテーマでもあるはずの「誓う」という表現が詩全体のなかで埋もれてしまっている印象を受ける。もうひとつ気になる点を挙げれば、プロペルティウス 3.6 の詩も冒頭に dic とカトゥッルスの 70 番の詩と同じ動詞を使っているという点である。また、ディオスコリデースも（『ギリシア詞華集』5.52.1）ὅρκος という単語を同一行内で二度使っている[*6]。カトゥッルスがカッリマコスの詩を翻案した際、誓うというギリシア語 ὤμοσε(ν) はラテン語になると dicit に訳されている。ラテン語では dico という語で「誓う」という意味を示せる[*7]。3.6 冒頭で使われている dic は、奴隷のリュグダムスに対してキュンティアが彼の見たものを言うように頼むところではあるが、詩の冒頭、それも一番最初の強調的な位置に dic は置かれている。誓いというこの詩のテーマともいえるものが dic という語にも含意されている可能性はある。

プロペルティウス 3.6 の詩の構造が変わっていることは Heyworth & Morwood も指摘している[*8]。最初は詩人がリュグダムスに語りかけるところから始まり、次にリュグダムスの伝えるキュンティアの直接の台詞がきて、そのキュンティアの台詞に詩人が応答するような形になっている。キュンティアの台詞がただ引用されるだけでなくそれに対して詩人が反応をして話が展開するというのはプロペルティウスの他の詩には見られない。

Heyworth はこの詩の構造について、行替えと欠行を想定することによって詩としての形を自然にするように直そうとしている。彼は 12 行と 13 行の間に欠行を想定して、さらに 3-4 行を 12 行の後に持ってくる。この詩の中にはリュグダムスの発語の台詞が存在しないため、こ

---

*6 Gow & Page はこのテキストに対して疑いを向けている。このエピグラムの話し手がソーシパトロスであるはずがないということや最初の ὅρκον は次に出てくる ὅρκος と同じ主格が予想されるのにもかかわらずそうではないという点で、短剣符をテキストに記している。

*7 *Oxford Latin Dictionary* では 6a の項目に分類されている。

*8 Heyworth & Morwood p.146

のような直しを Heyworth は提案している[*9]。こうすることで欠行を含めた 13 行目からリュグダムスの台詞とすることができ、構造はわかりやすくなる。しかし、Heyworh & Morwood の考えるように欠行に uidi のような単語を想定してしまうと台詞を言う人間が 3 人になってしまう[*10]。無論リュグダムスは聞いたことをただ伝えることが役割ではあるが、その一語だけでもこの詩への介入が過ぎるように感じられる。あくまでここで対話の主要な登場人物はプロペルティウスとキュンティアであり、台詞もその二人のものだけに限定させるべきである。下記に会話調のエピグラムが『ギリシア詞華集』にもいくつかみられることは示すが、会話をしているのは 2 人だけである。さらに Heyworth のテクストのように読むためには写本に伝わるテクストに対して、かなり大幅な変更を加えなければいけないことになる。行替えに加え欠行を想定し、さらに読みの変更しなければいけない。しかし、そうまでして写本のテクストに対して大幅な変更を加えなくても解釈できるのではと筆者には思える。以下に『ギリシア詞華集』の詩を引き合いに出しつつそれについても考えていきたい。

χαῖρε σύ. - καὶ σύ γε χαῖρε. - τί δεῖ σε καλεῖν; σὲ δέ;-μήπω
　τοῦτο φιλοσπούδει; –μηδὲ σύ. –μή τιν΄ἔχεις;
αἰεὶ τὸν φιλέοντα.- θέλεις ἅμα σήμερον ἡμῖν
　δειπνεῖν; -εἰ σὺ θέλεις. – εὖ γε· πόσου παρέσηι;
-μηδέν μοι προδίδου. – τοῦτο ξένον. - ἀλλ΄ὅσον ἄν σοι
　κοιμηθέντι δοκῆι, τοῦτο δός.- οὐκ ἀδικεῖς.
ποῦ γίνηι; πέμψω. – καταμάνθανε. – πηνίκα δ΄ἥξεις;
　- ἢν σὺ θέλεις ὥρην. – εὐθὺ θέλω. – πρόαγε.

「ごきげんよう。」「あなたもごきげんよう。」「君のことは何て呼べばいいかな。」「あなたのほうは。」

[*9] Heyworth pp.304-5
[*10] Heyworth & Morwood p.149

「そんなに焦らないでくれよ。」「あなたのほうこそ。」「先客はいないのかい。」
「いつも恋人はいるわ。」「今日ぼくと一緒に
食事でもしないかい。」「あなたがよければ。」「よし。君と一緒にいるとなるといくらだい。」
「前金はいらないわ。」「それは変わってるね。」「その代り、あなたが
寝てみて思ったほどの金額を私にちょうだいな。」「不正がないね。」
「君はどこにいるんだい、送っていくよ。」「行けばわかるわ。」「どのくらいでつくんだい。」
「あなたが望む時間に。」「今がいい。」「連れてって。」

『ギリシア詞華集』5.46 ピロデーモス

-χαῖρε, κόρη. – καὶ δὴ σύ. – τίς ἡ προϊοῦσα; - τί πρὸς σέ;
- οὐκ ἀλόγως ζητῶ. – δεσπότις ἡμετέρη.
- ἐλπίζειν ἔξεστι ; - θέλεις δὲ τί; - νύκτα. – φέρεις τι;
- χρυσίον. - εὐθύμει. - καὶ τόσον. – οὐ δύνασαι.

「ごきげんよう、娘さん。」「あなたも。」「君の前を行くのは誰だい。」「それがあなたにとってなんなのかしら。」
「理由があるから尋ねているんだよ。」「私の女主人よ。」
「望みがあるんだけど。」「何かしら。」「夜だ。」「なにか持ってきてる。」
「お金さ。」「元気を出して。」「これぐらい。」「ダメね。」

『ギリシア詞華集』作者不明 5.101

上の二つの会話調のエピグラムは会話だけで成り立った特色ある詩となっている。プロペルティウスがこのような会話調のエピグラムなどを参考にして 3.6 の詩を作った可能性は十分あるだろう。しかしながら、プロペルティウスはこのようなエピグラムを取り入れながらも独自の詩を作り上げている。『ギリシア詞華集』に収録されているエピグラムはいずれも会話だけであり、その会話自体が数単語で形成され、詩も数行で終わっているものである。『ギリシア詞華集』5.46 は男と売春婦との

会話であり、その交渉のやり取りである。『ギリシア詞華集』5.101 は男と召使の女のやり取りである。その女主人が前方を歩いていることは言及されるが、実際に詩の中に登場してくることはない。登場人物が 3 人いるのに、その 1 人が台詞を発さないという共通点がこの二つの詩にはみられる。この詩と同じ手法がプロペルティウス 3.6 でも取られているのではないかと考えられる。この詩は間にリュグダムスという奴隷を挟んで、プロペルティウスとキュンティアとのやり取りが行われる。直接のやり取りではない。さらに、プロペルティウスのこの詩の重要な要素としてもう一つ挙げられるのは、プロペルティウスが奴隷の名としてリュグダムスと呼びかけるものの、それに対して奴隷のリュグダムスが自分の台詞を言う場面は出てこない。ここでは伝言を伝える役割を持ったリュグダムスの存在感がなくなり、呼びかけられる名前だけが残ることで、プロペルティウスとキュンティアの伝言として伝えられた会話が、あたかも直接やりとりしているかのように描かれている。重要な伝達者の役割を担っているリュグダムスが自分では台詞を発しないということがこの詩の特徴的な点であると考えることができるのではないだろうか。そして、この奴隷を間に挟むという要素が、『ギリシア詞華集』のエピグラムの単純な詩をさらに敷衍させて、より長くより詳細な状況を詩の中に組み込むことによって、複雑な作りにしている。

以上のように、プロペルティウスの詩と『ギリシア詞華集』との対応関係を述べてきた。このように詳細に分析することで、それぞれの詩がどのような関連性をもっているかが多少なりとも明らかにできたのではないかと考える。また、プロペルティウスがどのように『ギリシア詞華集』の影響を受けているのかを見ることもできたと筆者は考える[*11]。

[*11] 本稿の執筆にあたっては匿名の査読委員の方々にとても有益な御助言をいただいた。ここで御礼を申し上げたい。